

政策創造研究科

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】(参考)

創設から15年が見えてこようという時点で、政策創造研究科は今や地域や社会に堅固な人材の柱を打ち込んでいる。

当研究科の運営には、自らの特性をしっかりとわきまえた上で、経年的、合理的に進められてきた痕跡が窺える。その一つは、社会人のリカレント教育にターゲットを絞りながら、なお学部卒業間もない学生にも対応できる体制の設定。講義プログラム、論文執筆環境の構築、社会に点在する組織との協働、それに地域への施策還元に意欲的に取り組みつつ、一つ一つに修正を加えて改善の道を進んできたという自負が感じられる。

開設から10年余を経た段階で見舞われたのが2020年春先に現実化した新型コロナウイルス蔓延であった。「学際的」「地域との連携」を標榜しながら、屋外での活動に縛りがかかる年月を、オンライン、ハイブリッド、ハイフレックスに道を求め、ようやく本来の軌道を取り戻したところである。

年度が変わってようやく新たな可能性が見え始めた2022年度であるが、ウィルスの影響はまだ完全に姿を消したわけでもない。それでもこの研究科は総力を上げて、個別の研究だけではなく、研究世界や調査領域を縦や横につなぐ「学際性」「地域や他団体との連携」を強く推し進めようとしている。そこで目につくのは意欲的な働きかけの数々である。「学生からの意見・要望の評価」を行いながら、同窓会、卒業生との連絡体制の強化を図り、ネットワークをさらに充実したものにしようと試みている。まさに研究科の理念・目的に向かった様々な目標設定は、政策創造研究科の将来をより堅固で柔軟なものにしてくれるものと誇らしく期待させるのに十分である。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

現在は対面授業に移行しており、平常時に戻ってはいるが、コロナ禍のもとで試行されたハイフレックス、ハイブリッド、オンラインアクティブラーニング等の手法を活用していく準備はしておきたい。FD活動も教員個人個人の研究を共有し、組織の活性化に一層、尽力したい。社会貢献・社会連携の再強化に関してはやはり教員個人個人のマンパワーに関わっていくが、その実績などを広範に伝搬することに努めたい。2023年度入試では若干の落ち込みはあったものの、修士課程で約1.5倍の競争率になっている。さらに認知を高め、安定させていきたい。

当研究科では個別の研究の公刊等も積極的にを行い、かつ研究世界や調査領域を縦や横につなぐ「学際性」「地域や他団体との連携」「諸外国の研究機関との連携」にも具体的な形を展開しつつある。また修了生のネットワークもそういった面での活用ができればと考えている。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

1.1①授与する学位ごとに、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を記入してください。

政策創造研究科の修士課程の学位を授与するにあたっては、政策形成に関する幅広い関連知識や多様な研究スキルの習得とともに広い視野、現場感覚やある程度の実務も要求される。したがって所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格し、以下に示す水準に達した者に修士（政策学）の学位を授与する。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | |
|---|----|
| <p>DP1. 専門的かつ学際的な知識の修得</p> <p>DP2. 事例分析あるいは社会調査等に関する知見・能力の修得</p> <p>DP3. 既存研究のレビュー・理論的な枠組みの構築</p> <p>DP4. 社会問題解決に向けての政策提言能力の修得</p> <p>DP5. 実習や中間発表における助言・指導を踏まえて今後の研究活動や社会活動に展開しうる水準に達した修士論文または政策研究論文を完成</p> <p>博士後期課程の学位については、博士（政策学）と博士（学術）の2つがある。いずれの学位においても中間発表はもとより学会誌投稿論文、一定の語学基準の達成を博士論文提出の条件としている。</p> <p>所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格し、以下に示す水準に達した者に博士（政策学）の学位を授与する。</p> | |
| <p>DP1. 研究領域に関する専門知識や分析手法を修得</p> <p>DP2. 新たな知見につながる発見・解明、独創的な問題設定や理論的視点の提示</p> <p>DP3. 実社会に貢献する新奇性の高い政策理念の提示</p> | |
| <p>所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格し、以下に示す水準に達した者に博士（学術）の学位を授与する。</p> | |
| <p>DP1. 研究領域に関する専門知識やシステムの分析手法を修得</p> <p>DP2. 新たな知見につながる発見・解明、独創的な問題設定や理論的視点の提示</p> <p>DP3. 学際領域における顕著な貢献</p> | |
| 1.1②上記のディプロマ・ポリシーには、授与する学位において学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果が示されていますか。 | はい |
| 1.1③上記のディプロマ・ポリシーを公表していますか。 | はい |
| 【根拠資料】 | |
| 研究科 HP、研究科案内 | |

1.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

| |
|---|
| 1.2①授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を記入してください。 |
| <p>本研究科は独立大学院として多様で柔軟なカリキュラムを提供しており、政策づくり、地域づくり、産業創出等を担う高度専門職業人および専門的知識と実務能力を兼ね備えた社会人・研究者を育成する。そのため3創造群・9プログラムのカリキュラムを編成している。</p> <p>修士課程においては</p> <ol style="list-style-type: none"> 多様なバックグラウンドやレベルの社会人に対応するため、導入科目として入門科目を設置して、さまざまな社会人に対応できるカリキュラムを設置する。 基本科目には、「政策ワークショップ」及び「政策分析の基礎」をはじめ、多様な研究スキル及び政策研究に関する幅広い関連知識を習得する科目を配置し、フィールドワーク等のアクティブ・ラーニングを取り入れた授業により、社会問題解決に向けての政策提言能力の修得をはかっている。 各創造群の専門領域のプログラム科目を設置するとともに、専門領域だけではなく、社会人として必要な広い視野を形成し、学際的な研究を促進するため、所属する群以外の科目を関連科目として履修可能としている。 演習科目では修士論文作成が最終目標であるが、コースワークを重視して研究方法や研究スキルに関するカリキュラムを提供している。教員スタッフと研究 |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | |
|---|----|
| <p>科ディレクター（履修指導や研究指導に加え、本研究科の管理運営業務を担う教員）により入学前から入学後、修士課程修了までガイダンスや指導をしている。</p> <p>5. 現在働いている社会人に対して、仕事と学業との両立ができるよう平日夜間と土曜日に 授業を開講している。長期履修制度（入学時選択）等の導入により社会人学生をサポートする。</p> | |
| <p>博士後期課程においては</p> <p>1. 基本科目として「研究法」「合同ゼミ」「外国語文献講読」を必修とし、リサーチワークだけでなくコースワークにも注力している。</p> <p>基本科目と専門領域科目を履修した上で、研究指導により博士論文の完成を目指す。</p> | |
| 1.2②上記のカリキュラム・ポリシーには、授与する学位において学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成（教育課程の体系、教育内容）・実施（教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等）方針が示されていますか。 | はい |
| 1.2③上記のカリキュラム・ポリシーを公表していますか。 | はい |
| 【根拠資料】 | |
| 研究科 HP、研究科案内 | |

1.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

| | |
|---|----|
| 1.3①「法政大学大学院学則」第 15 条（「単位」）に基づいた単位設定を行っていますか。 | はい |
|---|----|

1.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

| | |
|--|----|
| 1.4①学生の履修指導を適切に行っていますか。 | はい |
| 1.4②シラバスの内容の適切性と授業内容とシラバスの整合性を確保していますか。 | はい |
| 1.4③研究指導計画（研究指導の内容及び方法、年間スケジュール）を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。 | はい |
| 1.4④研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。 | はい |
| 【根拠資料】 | |
| 研究科 HP、研究科案内 | |

1.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

| | |
|--|----|
| 1.5①「法政大学大学院学則」第 20 条の 2（入学前既修得単位の認定）に基づき、既修得単位などの適切な認定を行っていますか。 | はい |
| 1.5②「法政大学大学院学則」第 22 条（修了要件）、第 26 条（修了要件）に基づき、卒業の要件を明確にし、刊行物、ホームページ等のいずれの方法によっても、予め学生に明示していますか。 | はい |
| 1.5③成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための措置を講じていますか。 | はい |
| 1.5④学位論文審査基準を定め、文章等によって予め学生に明示し公表していますか。 | はい |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | |
|--------------|--|
| 【根拠資料】 | |
| 研究科 HP、研究科案内 | |

1.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

| | |
|--|----|
| 1.6①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定をしていますか。 | はい |
| 1.6②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標に基づき学生の学習成果を把握していますか。 | はい |
| 1.6③学習成果を可視化していますか。 | はい |
| 【根拠資料】 | |
| 研究科 HP、研究科案内 | |

1.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

| | |
|---|----|
| 1.7①授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。 | はい |
| 1.7②大学評価室による学生調査結果（新入生アンケート・修了生アンケート）を組織的に利用していますか。 | はい |
| 【根拠資料】 | |
| 研究科 HP、研究科案内 | |

(2) 特色・課題

| | |
|---|-----------|
| 以下の項目の中で、研究科として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、記入をしてください。 | |
| 【教育課程・教育内容】【教育方法】【学習成果】それぞれの項目の中で「特色」または「課題」を選択し、内容について記入してください。 | |
| 【教育課程・教育内容】 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの適切性と連関性の検証 ・学生の能力育成のための、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容の適切な提供 ・コースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせた教育の提供 ・専門分野の高度化に対応した教育内容の提供 ・大学院教育のグローバル化推進のための取り組み | |
| 特色 | 修士課程・博士課程 |
| コースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせた教育の提供 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・本研究科では修士課程においても、多様な社会人を主要な対象とし収容定員も多いため、コースワークを基本にすえて教育しているが、修士論文作成には指導教員を中心としたリサーチワークの機会を幅広く提供している。 ・教育課程の編成・実施方針に基づいて、「群」と「プログラム」からなる教育課程を体系的に整備するとともに、授業科目を適切に配置するよう努めてきている。 ・コースワークにおいては、各プログラムの専門科目の他、政策科学の学問的基礎となる「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」を必修科目に、「研究法」「調査法」「質的調査法」等を選択必修科目とし、研究に必要な専門知識及びスキルの修得を図る。さらに、2020年度には分析手法に関する授業科目の改善についてのゼミ長会の意見を反映して教務委員会が検討し、2020年度に「質的調査法」「フィールドワーク演習」を新設した。ただし「フィールドワーク演習」に関しては2022年度はコロナ禍のため休講、2023年度も休講予定である。 ・リサーチワークとしては、各プログラム演習において研究及び論文指導を行っている。また、講義科目の中で、修士論文と連携させた、各自の研究テーマに応じたリサー | |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | |
|---|-----------|
| <p>チ課題を課し、その発表内容を授業内で評価対象にするなど、体系全体でのコースワークとリサーチワークの連携にも留意している。また、入学時点の研究計画書を群で共有し、群の教員が講義等を通じてゼミの学生に研究支援を行えるようになっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横断ゼミプロジェクトでは、全国各地でのフィールドワークやWEBアンケート調査等の特色あるリサーチを実施し、ゼミの枠を越えたりサーチワークに取り組み、その成果報告書も作成している。 | |
| <p>【教育方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等） ・授業がシラバスに沿って行われているかの検証（後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等） | |
| 特色 | 修士課程・博士課程 |
| <p>教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ディレクター」を置いて、受験相談を丁寧に行っている。基本的には院生を教員がマンツーマンで指導する体制が整えられており、履修指導や学習指導を入念に行っている。 ・履修指導と学習指導に関しては、入学前後のガイダンスはもとより、指導役の教員が弾力的に相談に応じられるような体制を整えている。特に、当研究科の特徴として、入学時点からプログラム（ゼミ）に所属し、長期間指導教員との関係性が構築されるため、学生に対し親身できめ細かい対応が可能である。 ・同窓会シンポジウムを毎年実施することで、修了生とのネットワークを強化し、日常的に修了生からアドバイスをもらえる体制を整えている。 | |
| <p>【学習成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価及び単位認定を行うための制度や学位授与の実施手続き及び体制についての適切な運用 ・学位の水準を保つための取り組み ・学習成果を把握する取り組み ・学習成果を定期的に検証し、その結果をもとにした教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組み | |
| 特色 | 修士課程・博士課程 |
| <p>学位の水準を保つための取り組み</p> <p>学際性の高い当研究科としては、兼ねてから論文評価が「群」によってばらつくことがあったが、それをそのまま放置することなしに、議論を重ね、「群」ごとに分けての学位水準の担保を図ることとした。また公平性を保つために「群」ごとの優秀論文等の選定に当たっては外部の教員に依頼している。</p> <p>その他、上記項目以外で研究科として「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。</p> | |
| <p>特色</p> <p>中国人留学生を相対的に多く受け入れているため、「研究法（中国語）」を用意しており、研究に先立つ準備ができるよう配慮がなされている。また近年では韓国人留学生、中国、韓国からの在外研究員の受け入れも検討しており、さらにグローバル化が図られている。</p> | |
| <p>課題</p> <p>特になし。</p> | |

2 学生の受け入れ

(1) 点検・評価項目における現状

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

2.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

2.1①研究科ごとに学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を記入してください。

政策創造研究科では、ディプロマ・ポリシーに謳う到達目標を達成して本研究科の理念にかなう人材を輩出するために、研究能力のある人材を積極的に受け入れる。身の回りで直面する事象に深い問題意識を持つ社会人はもとより、政策研究に意欲のある学生と留学生を対象とする。

【修士課程】

修士課程では、国や自治体の政策、企業経営や非営利の組織運営、地域づくりなどの分野において高度職業人及び研究者を目指す人材を求める。選考に当たっては、記述式の試験（一定の社会人経験がある者は免除）と研究計画に基づく面接を行う。留学生については日本語能力を合わせて判定する。

求める人材は以下を満たす者である。

1. 政策研究に必要な学問的知識や研究手法の習得に意欲のある者
2. 経済・社会・文化・都市・企業などの事象に関して広い視野から考察し、学術的研究に知的関心が深い者
3. 社会人の場合は職務経験や実績があり、研究意欲のみならず入学目的と修了後の展望が本研究科の育成目標に適合している者

【博士後期課程】

博士後期課程では、本研究科の修士課程達成水準から独創性に富んだ高度な研究者水準への飛躍を追求する人材を求める。選考は、修士論文実績、研究計画に基づく面接を原則とする。

求める人材は以下を満たす者である。

1. 本研究科修士課程修了者は優秀な修士論文を修めた者、またはその他の修了者を含めそれに相当する研究実績のある者
2. 自立した研究者として学術論文執筆が見込める者
3. 高度な研究者として学界で認められるために必要な学術知識、研究手法を習得できる者
4. 外国語（英語）に関して研究遂行に必要な基礎力のある者

学術的研究能力と政策立案能力の両面において優れた適性のある者

2.1②上記のアドミッション・ポリシーには、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを踏まえた、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法が明確に示されていますか。

はい

2.1③上記のアドミッション・ポリシーを公表していますか。

はい

【根拠資料】

研究科 HP、研究科案内

2.2 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

2.2①アドミッション・ポリシーに基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、入学者選抜をどのように公正に実施していますか。

・本研究科は地域を中心とした政策づくりのための教育研究を目的とした独立研究科である。政策の教育研究には理論とともに、政策現場の経験も不可欠である。また、本政策創造研究科で学ぶ高度専門職業人の多くは、地域・企業などで政策形成の現場で働いており、現場における問題解決能力や政策構想能力の向上を期待している。

・故に年3回の入試では基礎学力及び人間性、向上心などを評価の指標として教員間で厳正に議論して入学者の選抜を実施している。研究科 HP、研究科案内で公表を行って

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

いる。

2.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

| | |
|--|----|
| 2.3①【2023年5月1日時点】研究科・専攻における収容定員充足率は、下記の表1の数値を満たしていますか。 | はい |
|--|----|

2.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

| |
|---|
| 2.4①上記項目において【いいえ】と回答した場合は、その理由と改善に向けた今後の取り組みについて記入してください。 |
| |

表 1

| | | |
|---------------------------|------|-----------------|
| 研究科・専攻における収容定員に対する在籍学生数比率 | 修士課程 | 0.50 以上 2.00 未満 |
| | 博士課程 | 0.33 以上 2.00 未満 |

3 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

| |
|---|
| 3.1①研究科の求める教員像および教員組織の編成方針を記入してください。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 各分野において理論的バックグラウンドを持ちながら、何らかの形で政策形成に関わってきたキャリアを持つ教員が必要であり、そうしたキャリアのない教員は社会人を対象とした学生に十分対応できないことがある。本研究科では博士の学位を持ち、何らかの形で政策形成に関わりのある研究者を主力とした教員組織を編制することを方針としている。 3群、9プログラム体制で「地域創生、再生」を念頭に学際的な教員編成を行っている。 |

3.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

| | |
|---|---|
| 3.2①研究科の教員組織の編制は、理念・目的、教員組織の編制方針に整合していますか。 | はい |
| 3.2②教員組織の規模について、教育研究上必要となる数の専任教員がいますか。 | はい |
| 3.2③専任教員の専門性や、主要科目への配置など、教育を実施するうえでどのような体制をとっていますか。 | <ul style="list-style-type: none"> 政策創造研究科教授および准教授等資格内規に従って教員を採用している。 専任教員の専門性に基付き、3群のいずれかのプログラムに配置している。 共通科目に関しては主担当の教員を配置しているが、9人の専任教員の持ち回りで授業を実施している。 |

3.3 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

| | |
|--|----|
| 3.3①教員の募集、採用、昇任等の手続きや運用に関する規程は整備されていますか。 | はい |
| 3.3②上記の規定は、公正性、適切性が担保されるよう適切に運 | はい |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | |
|--------------|--|
| 用されていますか。 | |
| 【根拠資料】 | |
| 研究科 HP、研究科案内 | |

3.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

| | |
|--|----|
| 3.4①研究科（専攻）内のFD活動は組織的に行われていますか。 | はい |
| 3.4②上記項目について【はい】と回答した場合は、2022年度のFD活動の実績（開催日・テーマ・参加人数）を記入してください。 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・FDに関しては年6回程度、教員メンバー間で研究交流を実施している。 ・大学でのFDセミナーへ適宜、教員が出席、その情報を教授会で共有している。 ※開催日 7月12日 橋本正洋教授 直近の研究について 9名参加 9月27日 柿野成美准教授 直近の研究について 9名参加 | |
| 3.4③研究科（専攻）内において研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。 | はい |
| 3.4④上記項目で【はい】と回答した場合は、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための取り組みの実績（開催日・テーマ・参加人数等）について記入してください。 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・研究科シンポジウムの実施 3月18日「人的資本経営の在り方を考える」 94名参加 ・研究科同窓会シンポジウムの実施 3月11日「リスク社会の観光について考える」 40名参加 | |

4 学生支援

(1) 特色・課題

| | |
|---|-----------|
| 以下の項目の中で、研究科として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、内容について記入をしてください。 | |
| 【学生支援】 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・学生の能力に応じた補習教育、補充教育 ・学生の自主的な学習を促進するための支援 ・学習の継続に困難を抱える学生（留年者、退学希望者等）への対応 ・成績不振の学生の状況把握と指導 ・外国人留学生の修学支援 ・オンライン教育を行う場合における学生への配慮（相談対応、授業計画の視聴機会の確保等） | |
| 特色 | 修士課程・博士課程 |
| 外国人留学生の修学支援 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・中国人向けに「研究法（中国語）」を開講している。 ・チューター制度を活用し、必用に応じてチューター日本語相談室の案内を適宜行っている。 | |
| その他、上記項目以外で研究科として「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。 | |
| 特色 | |
| 課題 | |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

5 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか。

| | |
|---|----|
| 5.1①研究科として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。 | はい |
| 【根拠資料】 | |
| 新入生ガイダンス資料、研究科ガイド | |

III 2022 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

| 評価基準 | 理念・目的 | |
|----------|---|--|
| 中期目標 | 人生 100 年時代におけるグローバル化の進展のもとで、都市・地域・組織が抱える課題について、政策という観点から問題解決能力・合意形成能力・システムデザイン能力を培い、価値観の潮流を先取りした社会を創出できる高度専門人材及び研究者の育成を目的とする。 また、「社会人の学び直し」需要に積極的に応えながら、その実態を把握し、教育・研究の質確保を重視する。そして研究科の創立理念である地域貢献も果たしていく。 | |
| 年度目標 | 地域の衰退を前提に、地域の課題に貢献できる教育・研究体制づくりを進めることを念頭に、学生のニーズに応じたプログラムの充実を目指す。さらに研究科として社会的貢献を果たすべく努力していく。引き続き、定員確保を継続していく。 | |
| 達成指標 | 各プログラムについて、地域の現状把握、分析を行い、学生の意見・要望を重視しつつ充実を図る。引き続き、留学生の比率を勘案しながら、定員を満たす。社会貢献活動の充実をはかる。 | |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | S |
| | 理由 | 年度目標及び達成指標に関しては概ね、学生のニーズにも答えられた。横断ゼミ、シンポジウム等アクティブラーニングも適宜、実施した。また定員も充足、教員、学生による社会貢献の試みも適宜、行われた。 |
| | 改善策 | 専任教員が 9 名という最小限の体制なので、これ以上、手を広げることは物理的に厳しい。今後の体制の変更を機に一層の努力を行いたいが、当面は現状維持で年度目標及び達成指標に設定し、内容、質の充実を図る。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 年度目標及び達成指標に関しては概ね達成したという執行部の判断に同意する。定員を充足し、横断ゼミ、シンポジウム、社会貢献の試みが適宜行われているためである。 |
| 改善のための提言 | 定員の確保に向けては、横断ゼミ、シンポジウム、社会貢献の試みなど、当研究科の優れた特徴を、より社会に発信していくべきと考える。しかし執行部所見どおり、体制変更に向けた過渡期にあるため、その方向性に合致した取り組みにしていくべきと考える。 | |
| 評価基準 | 内部質保証 | |
| 中期目標 | 高度専門職業人及び研究者の育成を実現するためのカリキュラム、教員、学生の支援、研究科としての社会貢献、学習成果などについて、独立した質保証を適切な評価指標に基づき専門的に実施する体制の整備。 | |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | | |
|-------|--|---|
| 年度目標 | 研究科としての社会貢献、学習成果などに関する適切な評価指標を、時代環境の変化にあわせアップデートする。修士論文も質を向上させていく。 | |
| 達成指標 | 評価指標のアップデート及び修士論文の質の向上をはかる。 | |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | A |
| | 理由 | 年度目標及び達成指標に関しては学際性の強い研究科なので、群ごとの評価指標を設定して、修士論文の評価に適用している。それにより修士論文の質は明確に向上した。 |
| | 改善策 | 群ごとの評価基準の可視化はまだ行われていないので、この点に関しては可能な範囲で着手すべきだと考えている。学生に明確に提示ができるように心掛けたい。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 執行部所見どおり、学際性の強い研究科という特徴に留意し、群ごとの評価指標による修士論文の評価、質の向上に努め、実際に修士論文の質は向上したと考える。 |
| | 改善のための提言 | 群ごとの修士論文の質の向上を目指すとともに、研究科全体としての横串を通した質の向上もはあべきと考える。このバランスをいかにとっていくかについての検討も必要である。 |
| 評価基準 | 教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】 | |
| 中期目標 | 高度専門職業人の育成等、社会的ニーズの変化に対応した群・プログラムの見直しを行う。 | |
| 年度目標 | アクティブラーニングのさらなる充実。横断プロジェクトの充実。 | |
| 達成指標 | 各プログラム・科目の履修者数と受講満足度、学生からの意見・要望の評価を行う。 | |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | A |
| | 理由 | 横断ゼミ、シンポジウムなどを通じてアクティブラーニングは適宜、実施された。コロナ禍の影響もあるなか、学生の期待には添えられたと考えている。各プログラム・科目の履修者数も幾分、偏りが減った。学生とはゼミ長会のメンバーと意見交換を行った。 |
| | 改善策 | アクティブラーニングに対してはこれでよいということはないので、学生のニーズを適確に把握してさらに充実させていきたい。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 執行部所見どおりであると評価する。特に、ゼミ長会をとおして学生と意見交換を行いつつ、横断ゼミ、シンポジウムなどを実施している部分が当研究科の強みである。 |
| | 改善のための提言 | 横断プロジェクトやアクティブラーニングの実施など、とりわけゼミ長会との意見交換を軸に、今後も改善を図っていくことが望ましい。 |
| 評価基準 | 教育課程・学習成果【教育方法に関すること】 | |
| 中期目標 | コースワークにおける双方向性の確保。各ゼミの特徴を生かしつつ、ゼミ間交流を促進する。 | |
| 年度目標 | 高度専門職業人、研究者向けのみならず、学部卒学生にも、時代に適合したプログラム及び科目の充実を進める。 | |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | | |
|-------|---|--|
| 達成指標 | アクティブラーニングへの教員個々の取り組みをはかる。横断プロジェクトの内容の多様化の促進。 | |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | A |
| | 理由 | 学部卒業生はいわゆる Z 世代に当たるので、慎重にニーズを探ってきたつもりだ。とくにデジタル化をベースとしての研究が増えてきているので、ゲスト講師の活用などで対応を図った。横断ゼミは前年に比べて積極的に地域への巡検を行った。 |
| | 改善策 | 直近での対応は難しいが、デジタルに明るい教員の登用も望まれる。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 高度専門職業人、研究者、学部卒学生、それぞれのニーズを勘案し、なおかつ時代の変化を取り込んだプログラム設計、科目設計を進めていくことは執行部所見どおり、重要だが難しい課題であり、その対応を図ってきている。 |
| | 改善のための提言 | 執行部所見どおり、ゲスト講師の選定に工夫するとともに、中核となる教員の採用で工夫していく必要がある。 |
| 評価基準 | 教育課程・学習成果【学習成果に関すること】 | |
| 中期目標 | 各プログラムの専門知識の高度化とリサーチワークの基礎となる必修科目の充実をはかる。 | |
| 年度目標 | 必修科目である修士の「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」と博士の「研究法」を円滑に実施し、分析手法習得の充実をはかっていく。 | |
| 達成指標 | 「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」「研究法」の実施状況を評価しながら、分析手法取得の充実を評価していく。 | |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | B |
| | 理由 | 必修科目は円滑に運営されてはいるが、それを契機にした学生間のトラブルも多少、あった。コロナ禍という現状を踏まえつつ、今、一層の学生との信頼関係の構築が望まれる。 |
| | 改善策 | 学生間、教員・学生間というつながりに対して、信頼度を高める方策を模索していく必要があるだろう。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」と博士「研究法」により分析手法の充実は図られていると評価できる。学生間のコミュニケーションの課題は、執行部所見のとおりである。 |
| | 改善のための提言 | 執行部所見のとおりであり、特に入学当初の段階でのグループ討議での学生間のコミュニケーションについて、留意する必要がある。 |
| 評価基準 | 学生の受け入れ | |
| 中期目標 | 高度専門職業人（の）を一定割合確保する。多様な人材を積極的に活用できる社会を目指せるようダイバーシティ効果を意識した学生受け入れを行う。 | |
| 年度目標 | 専門実践教育訓練給付金制度を活用した社会人学生の確保、外部への働きかけによる学部卒学生の確保を行いつつし、教員による説明会とゼミ見学会を強化する。 | |
| 達成指標 | 教員による説明会とゼミ見学会の実施状況と効果を検証及びそれ以外の学生集めをいかに実施していくかも検証。 | |
| | 教授会執行部による点検・評価 | |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | | |
|-------|--|---|
| 年度末報告 | 自己評価 | A |
| | 理由 | 専門実践教育訓練給付金は社会人学生の確保に効果を上げており、教員による進学相談、ゼミ見学会も以前に比べれば具体的な効果を上げている。 |
| | 改善策 | 教員による進学相談、ゼミ見学会の効果に関しては数値化したわけではないが、受験の動線になっていることは明瞭だ。また受験の面接時に志望の動機、情報の入手方法なども聞き、共有できればと考えている。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 執行部所見どおり、専門実践教育訓練給付金、進学相談、ゼミ見学会の効果は大きいと評価できる。 |
| | 改善のための提言 | 進学相談、ゼミ見学会の導線となる広報、周知の多様化については検討の余地がある。 |
| | 評価基準 | 教員・教員組織 |
| 中期目標 | 現在の研究科の課題に対応できる委員会の設置及び検討・見直し。プログラムの見直しと教員の若返り化・女性教員の比率を考慮した人材の確保（充足）。 | |
| 年度目標 | 各委員会の一層の活動強化を図る。 | |
| 達成指標 | 各委員会の活動の評価。 | |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | A |
| | 理由 | 各委員会も例年通り、積極的に活動した。イレギュラーの委員会的な組織も設置されたが、それに関しても教員、事務方、積極的に取り組んだ。 |
| | 改善策 | 教授会内でのさらなる議論、情報の共有化を図っていきたい。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 執行部所見どおり、各種委員会活動について、教員、事務方とも積極的に取り組んでいる。 |
| | 改善のための提言 | 現状十分に機能していると思われるため、より一層、教授会で委員会間のコミュニケーションを図っていければよい。 |
| 評価基準 | 学生支援 | |
| 中期目標 | 相談体制の充実。研究科同窓会を通じたネットワークづくり。 | |
| 年度目標 | 留学生を含めた、ディレクターによる受験生との相談、および執行部とゼミ長会による相談体制の充実。同窓会の卒業生との連絡体制の強化。 | |
| 達成指標 | ディレクター個別相談、執行部とゼミ長会による相談会の実施、同窓会シンポジウムにおける同窓会の卒業生への連絡体制の強化を評価していく。 | |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | A |
| | 理由 | 留学生を含めた、ディレクターによる受験生との相談、および執行部とゼミ長会による相談体制の充実。同窓会の卒業生との連絡体制の強化は図られたが、コロナ禍での制約は払拭できなかった。 |
| | 改善策 | 参加人数等の情報の共有化を一層、図りたい。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| 所見 | ゼミ長会と7執行部の対話は継続しており、3月11日に研究会同窓会シンポジウムも実施されるため、良好な結果であると評価したい。 | |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | | |
|--|----------------|--|
| | 改善のための提言 | コロナ禍により同窓会シンポジウムの参加状況に制約があった。今後、以前の状態に戻すとともに、さらなる参加者の増加に関する取り組みが必要と考える。 |
| | 評価基準 | 社会連携・社会貢献 |
| | 中期目標 | 政策創造に関して、広く社会に情報を発信するとともに地域まちづくりに貢献する。 |
| | 年度目標 | 2 回程度のシンポジウム開催。横断プロジェクトによる地域貢献の充実。各教員を通じた社会貢献の実施。 |
| | 達成指標 | 横断プロジェクトなどによる地域貢献の充実。研究科主催によるシンポジウムの実施。引き続き、横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携も図る。オンラインの研究科シンポジウムやセミナーも検討する。各教員を通じた社会貢献の実施をはかる。 |
| 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | 自己評価 | A |
| | 理由 | 横断プロジェクトなどによる地域貢献の充実。研究科主催によるシンポジウムの実施は積極的に実施された。オンラインでのゲスト講師の授業、プログラム演習の情報は教員間で共有され、学生にも伝達されている。 |
| | 改善策 | 各教員の社会貢献の情報共有に関しては、FD を活用して行っていきたい。 |
| | 質保証委員会による点検・評価 | |
| | 所見 | 執行部所見どおりである。特に横断プロジェクトにおいては、特定の地域とつながりができる可能性が高いため、それをいかした取り組みができています。 |
| | 改善のための提言 | 執行部所見どおり、各教員が社会貢献を図っているため、FD における、その情報共有の強化が望ましい。 |
| <p>【重点目標】</p> <p>より学生にとって魅力的な研究科を目指すべく、プログラム及び科目を改廃して、適切に実施すること、および「専任教員の分担で、分析手法習得機会の一層の強化をはかる」ためのプログラムの充実を継続していく。</p> <p>さらに、社会貢献として横断プロジェクトの活用及び教員個々の活動の充実、各委員会の活動充実、学生確保のための改編した教員相談会&ゼミ見学会を充実させる。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携による社会貢献、地域貢献 ・研究科シンポジウムやセミナーの実施のあり方も検討する。 ・各委員会の活動強化 ・受験相談会&ゼミ見学会の充実 <p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>目標に掲げた事項に関しては滞りなく実施された。もちろん欲を出せばきりがなが、研究科の現状からすれば充分だと考える。ただこの状況に甘んじることなく、努めていきたい。</p> | | |

IV 2023 年度中期目標・年度目標

| | |
|------|---|
| 評価基準 | 理念・目的 |
| 中期目標 | 人生 100 年時代におけるグローバル化の進展のもとで、都市・地域・組織が抱える課題について、政策という観点から問題解決能力・合意形成 |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | |
|------|--|
| | 能力・システムデザイン能力を培い、価値観の潮流を先取りした社会を創出できる高度専門人材及び研究者の育成を目的とする。 また、「社会人の学び直し」需要に積極的に応えながら、その実態を把握し、教育・研究の質確保を重視する。そして研究科の創立理念である地域貢献も果たしていく。 |
| 年度目標 | 地域の衰退を前提に、地域の課題に貢献できる教育・研究体制づくりを進めることを念頭に、学生のニーズに応じたプログラムの充実を目指す。さらに研究科として社会的貢献を果たすべく努力していく。引き続き、定員確保を継続していく。 |
| 達成指標 | 各プログラムについて、地域の現状把握、分析を行い、学生の意見・要望を重視しつつの充実感。留学生の比率を勘案しながら、定員を満たす。社会貢献活動の充実。 |
| 評価基準 | 内部質保証 |
| 中期目標 | 高度専門職業人及び研究者の育成を実現するためのカリキュラム、教員、学生の支援、研究科としての社会貢献、学習成果などについて、独立した質保証を適切な評価指標に基づき専門的に実施する体制の整備。 |
| 年度目標 | 研究科としての社会貢献、学習成果などに関する適切な評価指標を、時代環境の変化にあわせアップデートする。修士論文も質を向上させていく。教員・学生間、学生間のコミュニケーションを図り、健全な教育の場を作っていく。 |
| 達成指標 | 評価指標のアップデート及び修士論文の質の向上。研究科内のコミュニケーションの充実を図ることよっての安心感の向上。 |
| 評価基準 | 教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】 |
| 中期目標 | 高度専門職業人の育成等、社会的ニーズの変化に対応した群・プログラムの見直しを行う。 |
| 年度目標 | アクティブラーニングのさらなる充実。横断プロジェクトの充実を図る。教員、学生双方の研究成果のアウトプットを積極的に行っていく。 |
| 達成指標 | 各プログラム・科目の履修者数と受講満足度、学生からの意見・要望の評価。研究成果のアウトプット。 |
| 評価基準 | 教育課程・学習成果【教育方法に関すること】 |
| 中期目標 | コースワークにおける双方向性の確保。各ゼミの特徴を生かしつつ、ゼミ間交流を促進する。 |
| 年度目標 | 高度専門職業人、研究者向けのみならず、学部卒学生にも、時代に適合したプログラム及び科目の充実を進める。 |
| 達成指標 | アクティブラーニングへの教員個々の取り組みをはかる。横断プロジェクトの内容の多様化の促進。 |
| 評価基準 | 教育課程・学習成果【学習成果に関すること】 |
| 中期目標 | 各プログラムの専門知識の高度化とリサーチワークの基礎となる必修科目の充実をはかる。 |
| 年度目標 | 必修科目である修士の「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」と博士の「研究法」を円滑に実施し、分析手法習得の充実をはかっていく。 |
| 達成指標 | 「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」「研究法」の実施状況を評価しながら、分析手法取得の充実を評価。 |
| 評価基準 | 学生の受け入れ |
| 中期目標 | 高度専門職業人の一定割合確保する。多様な人材を積極的に活用できる社会を目指せるようダイバーシティ効果を意識した学生受け入れを行う。 |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

| | |
|--|--|
| 年度目標 | 専門実践教育訓練給付金制度を活用した社会人学生の確保、外部への働きかけによる学部卒学生の確保を行いつつし、教員による説明会とゼミ見学会を強化する。 |
| 達成指標 | 教員による説明会とゼミ見学会の実施状況と効果を検証及びそれ以外の学生集めをいかに実施していくかも検証。 |
| 評価基準 | 教員・教員組織 |
| 中期目標 | 現在の研究科の課題に対応できる委員会の設置及び検討・見直し。プログラムの見直しと教員の若返り化・女性教員の比率を考慮した人材の確保（充足）。 |
| 年度目標 | 各委員会の一層の活動強化を図る。 |
| 達成指標 | 各委員会の活動の評価。 |
| 評価基準 | 学生支援 |
| 中期目標 | 相談体制の充実。研究科同窓会を通じたネットワークづくり。 |
| 年度目標 | 留学生を含めた、ディレクターによる受験生との相談、および執行部とゼミ長会による相談体制の充実。同窓会の卒業生との連絡体制の強化。 |
| 達成指標 | ディレクター個別相談、執行部とゼミ長会による相談会の実施、同窓会シンポジウムにおける同窓会の卒業生への連絡体制の強化を評価。 |
| 評価基準 | 社会連携・社会貢献 |
| 中期目標 | 政策創造に関して、広く社会に情報を発信するとともに地域まちづくりに貢献する。 |
| 年度目標 | 2 回程度のシンポジウム開催。横断プロジェクトによる地域貢献の充実。各教員を通じた社会貢献の実施。また教員個々の活動を共有する場も設けていく。 |
| 達成指標 | 横断プロジェクトなどによる地域貢献の充実。研究科主催によるシンポジウムの実施。引き続き、横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携も図る。オンラインの研究科シンポジウムやセミナーも検討する。各教員を通じた社会貢献の実施。 |
| <p>【重点目標】</p> <p>より学生にとって魅力的な研究科を目指すべく、プログラム及び科目を改廃して、適切に実施すること、および専任教員の分担で、分析手法習得機会の一層の強化を図るためのプログラムの充実を継続していく。</p> <p>さらに、社会貢献として横断プロジェクトの活用及び教員個々の活動の充実、各委員会の活動充実、学生確保のための改編した教員相談会&ゼミ見学会を充実させる。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携による社会貢献、地域貢献 ・研究科シンポジウムやセミナーの実施のあり方も検討する。 ・各委員会の活動強化 ・受験相談会&ゼミ見学会の充実 も図っていく。 | |

【大学評価総評】

「グローバル化と地方分権化のもとで、都市・地域が抱える公共的な課題について、政策という観点から研究・問題解決する能力、合意形成できる仕組みを構想するデザイン能力を培い、新しい価値観を創出してシステムをイノベーションすることができる高度専門職業人及び研究者の育成を目的とする」という理念のもと、定員の充足、横断ゼミ、シンポジウム、社会貢献の試みの実施により、年度目標及び達成指標に関しては概ね達成されていることは、専任教員が僅か 9 名という小さな所帯ながら、不断の努力の賜物と推察している。

学生間のコミュニケーションの課題が見られることに関しては注視していく必要がある。2023 年度も同目標が立てられていることから、改善が望まれる。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

質保証委員会から「体制変更に向けた過渡期にあるため、その方向性に合致した取り組みにしていくべき」とする提言があったが、「地域の課題に貢献できる教育・研究体制づくりを進めることを念頭に、学生のニーズに応じたプログラムの充実を目指し、社会的貢献を果たす」という設立当初の理念・目的を継承・発展させた研究教育組織となることを期待している。

【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

| | |
|--|--------------------------------|
| 2023年度自己点検・評価シートに記載された Ⅱ 自己点検・評価（1）点検・評価項目における現状を確認 | 法令要件やその他の基礎的な要件が充足していることが確認できた |
| <法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目> | |

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。